2016年度　呉尚浩ゼミ卒業論文

地域を再生させる木の駅プロジェクト

―東北地方への普及と山村の振興をめざして―

指導教員　呉尚浩
東北公益文科大学　公益学部公益学科
梅津直樹

地域を再生させる木の駅プロジェクト
―東北地方への普及と山村の振興をめざして―

梅津直樹

概要

現代の山村では、戦後のエネルギー革命によって家庭用エネルギーが木材から化石燃料に代わり、木材需要が減少した。そのため、山林の手入れが行き届かず荒廃してしまっている。

高知県仁淀川町では、土佐の森・救援隊の活動で、間伐材を地域通貨と交換する取り組みを行っていた。これを原型に全国どこででも実施できるように標準化されたものが『木の駅プロジェクト』である。

本論文では『木の駅プロジェクト』のメリットと課題を明確にする。研究の方法は、インターネットや文献調査、東北地方で実際に活動している木の駅へ出向きインタビューをし、全国の木の駅にアンケート調査を実施した。

先行研究では、一般的な木の駅のメリットとして、①林地残材の減少、②地域のＧＤＰ増大、③人口増加、④Ｃ材が有効利用できる、課題として⑤逆ザヤの発生、⑥木材の売り先がない、⑦出しやすい材がなくなり出材量が低下、⑧事務局の負担が大きい、⑨地域通貨の偏り、などが挙げられている。全国の木の駅へ対するアンケートでは、20 カ所の回答のうち、７割以上が木の駅のメリットであると実感したのは①で、課題に関しては⑧のみであった。５割以上を獲得した②、④、⑤、⑥、⑦、⑨は地域によってメリットにもなり、課題にもなりうることが分かった。

次に、東北地方の木の駅の特性をアンケート結果での比較や第２回東北ブロック木の駅会議での情報などをもとに導き出す。それぞれの木の駅には通常の活動に加えて様々な取り組みがあり、東北地方の木の駅は積極的に新しいことにチャレンジする傾向にあると推定した。

提案として、逆ザヤが発生しないように計画を立てる。薪ボイラーを普及させ、薪の需要を作り出し、出口問題解決を図る。行政の協力を得て山の境界の明確化に力を入れ、出材量が低下しないようにする。地域通貨に工夫を設ける、また、出荷者に木の駅の目的を十分に理解してもらうべきだと考える。（791 字）

もくじ

はじめに …1
第１章　『木の駅プロジェクト』とは …2
　1-1　目的と経緯 …2
　1-2　仕組み …3
　1-3　メリットと課題 …4
第２章　東北地方の木の駅の事例 …5
　2-1　しらたか木の駅プロジェクトの事例 …5
　　2-1-1　概要 …5
　　2-1-2　成果と課題 …6
　2-2　二ツ井宝の森林（やま）プロジェクトの事例 …7
　　2-2-1　概要 …7
　　2-2-2　成果と課題 …8
第３章　アンケートによる分析 …10
　3-1　全国の木の駅を対象とするアンケート調査に基づいた分析 …10
　3-2　東北地方の木の駅の考察 …15
第４章　課題の改善に向けて …17
おわりに …19
謝辞 …20
参考・引用文献 …20
ＷＥＢ参考・引用 …21

地域を再生させる木の駅プロジェクト

―東北地方への普及と山村の振興をめざして―

東北公益文科大学　梅津直樹

はじめに

筆者はある映画をきっかけに環境問題に関心を寄せるようになり、それを改善するための手段として、水環境の保全や地球温暖化の防止、県土の保全など様々な環境に良い影響を与えることができる森林整備が最も適切であると考えたため、森林に興味を持つようになった。本校に入学後、環境に関する呉尚浩教授の授業で鳥取県智頭町のＣ材[1]を杉小判という地域通貨に交換する取り組みがあることを学んだ。３年次での調べ学習で、木材自給率を引き上げるための方法を調べている時、授業で学んだ智頭町の取り組みにふれ、これが『木の駅プロジェクト』という名前の活動であることを知り、それについて深く学びたいと考えたため、今回この研究をするに至った。

本論文では木の駅ポータルサイトに登録されている全国の木の駅を対象としたアンケート調査の結果を集計して、木の駅のメリットと課題を明確にし、アンケート結果を考察していく。そして、導き出した課題に関して改善するための自分の考えを提案する。

論文の流れとしては、第１章では『木の駅プロジェクト』について詳しく述べていく。その際、先行研究に述べられている一般的な木の駅のメリットと課題を挙げる。第２章では山形県白鷹町のしらたか木の駅プロジェクトの事例と秋田県二ツ井町の二ツ井宝の森林（やま）プロジェクトの事例をそれぞれ述べる。第３章では全国の木の駅のアンケート結果を集計して、木の駅のメリットと課題を判定する。そして、インタビュー調査結果と合わせてアンケート結果を考察していく。その後、白鷹町と二ツ井町の事例を比較し、それぞれのアンケートの回答などを参考に東北地方の木の駅の特性を導き出す。第４章では第３章で明確化された木の駅の課題に関して、改善するための自分の考えを述べていく。

---

[1] 木材を品質や用途によって分類する際の通称。建材用とされる部分をＡ材、合板・集成材用とされる部分をＢ材と呼び、Ｃ材はそれらに適さない曲がり木や細い木などである。

第１章　『木の駅プロジェクト』とは

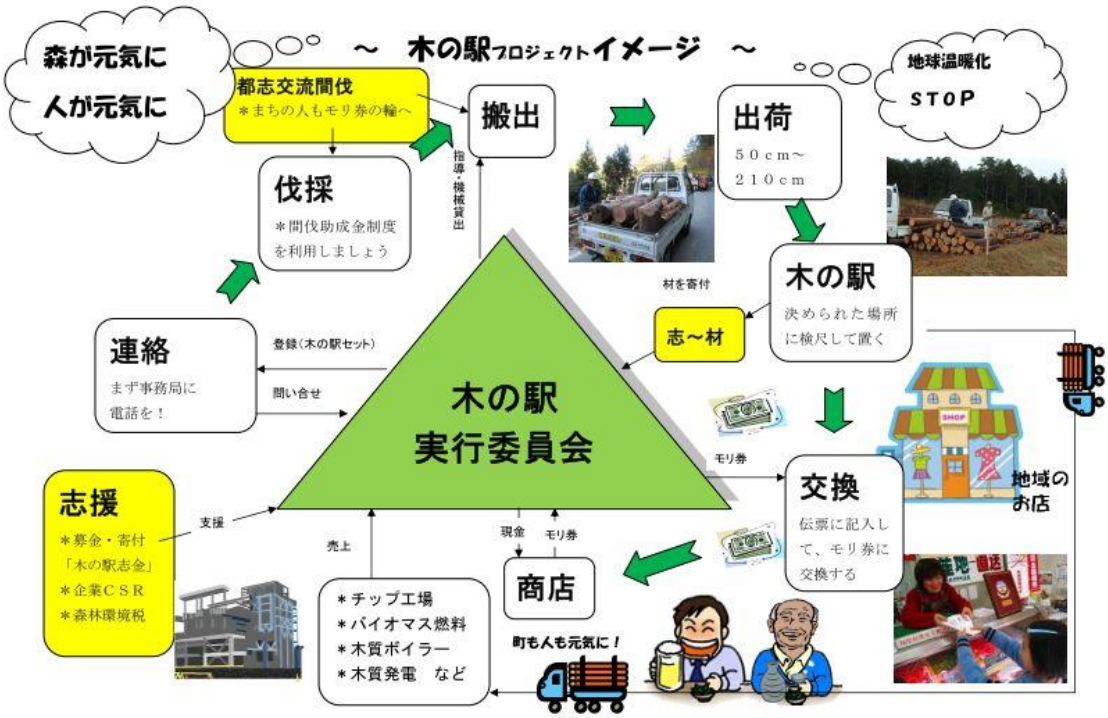
1-1　目的と経緯

現代の山村では、戦後のエネルギー革命によってそれまで家庭用のエネルギーとして主流であった木炭や薪などの木材から化石燃料が使われるようになり、木材需要が減少し山へ足を運ぶことも少なくなった。そのため、山林の手入れが行き届かず荒廃してしまい、かつての恵みの山が今やお荷物となってしまっている。また、山村内の高齢化が進み、若年層は仕事を求め都市へ移住するなどによって、人口減少や商店の消滅も問題となっている。しかし、ただ課題を解決できるような行政主体の取り組みを行えばそれで良い、ということはなく、民間が主体の取り組みでなければ「自分たちの地域は自分たちで守る」という「自治」の意識が芽生えず、自分たちの村への愛情や誇りも湧かないため、長続きせず問題解決には至らない。

これらの課題を解決するべく、2005年から高知県仁淀川流域である取り組みが始まった。それはＮＰＯ法人土佐の森・救援隊の活動で、「Ｃ材で晩酌を」を合言葉に副業的に低質な材を地域通貨で買い取る林地残材収集システム（土佐の森方式）である。後にこの活動を知った丹羽健司氏が、このシステムを仁淀川町にあるような大規模なバイオマスプラントがなくても実現できるように改良し、マニュアル化した。2009年にはＮＰＯ法人夕立山森林塾が岐阜県恵那市笠周地域で最初の木の駅を立ち上げた。これが『木の駅プロジェクト』の始まりである。その後、木の駅ポータルサイト（http://kinoeki.org/）が作られ、公開されるようになったことをきっかけに急速に広がり、2010年には鳥取県智頭町で、2011年には愛知県豊田市、岐阜県大垣市、高知県土佐町で木の駅を立ち上げ、現在（2016年12月時点）、全国で40カ所を超える地域で取り組んでいる。

1-2　仕組み

図１　木の駅プロジェクトイメージ



出典：「木の駅ポータルサイト」より引用

仕組みは図１のようなものである。まず、出荷者として木の駅プロジェクトに参加するためには、木の駅実行委員会（以下実行委員会）に申し込みを行う必要がある。問い合わせすると登録証と出荷伝票が渡され、登録が完了されると木の駅の土場[2]にその出荷者の名前のついた区画が設けられる。また、商店として参加する場合は商店の登録証が渡されるため、それに記入して提出すると登録される。

出荷期間では、出荷者はその地域の木の駅プロジェクトで決められた規格に沿って造材し、土場の自分の区画に出荷する。それらの木材の１本ごとに長さと末口径を測り、出荷伝票に記載して、それを実行委員会に提出する。検尺の際、『木の駅プロジェクト』としては自己検尺・自主申告方式を基本としている。なぜなら、木の駅プロジェクトの原型である土佐の森方式では高価な計量器（看貫[3]）が用いられているが、マニュアル化に当たって、どの地域でも取り組むことができるようにするために、木の駅プロジェクトでは必要なものを伝票やメジャー、チョークといった全て安価でシンプルなものにしたからである。しかし、自己検尺では誤魔化しや嘘が蔓延るのではないかと思われるかもしれないが、土場のそれ

[2] 伐り出した材木を一時集めておくところ。
[3] 集荷の状態と空荷の状態の差し引きで荷の重量を計測するための設備。

ぞれの区画には各々の名札があり、誰もが第３者に見られるため、そのような状況にはならない。また、名札を立てることには別の効果もある。それぞれの区画の木材を見ることができるため、あまり運んでいない人は「自分も頑張らなければならない」と考えたり、大きな木材があると「あれはどうやって伐ったのか」や「どんな風に運んできたのか」と話し合って勉強会が始まったりして、みんなのモチベーション向上にもつながる。そういった理由から、実行委員会が出荷伝票を受け取っても実行委員会による再検尺は行われない。

実行委員会は出荷伝票を受け取り、記入されている内容から材積を計算する。木材１トン当たり6,000円（木の駅によって異なる）に換算した地域通貨「モリ券」と出荷者が地域通貨を受け取ったことを証明するための発券・受取伝票を発行する。なお、地域通貨１枚分の価値は500円か1,000円のどちらかであり、名称や単位なども木の駅によって異なる。

数日後、出荷者は実行委員会からモリ券と発券・受取伝票を渡され、その伝票はサインして実行委員会に提出する。それからはモリ券を使用することができるがルールがあり、１つはプロジェクトに登録されている商店でしか使用できないこと、２つは現金と一緒には使うことができず、おつりは出ないこと、３つは有効期限があるということである。こういった規定からモリ券を使い切ろうとするために、普段は買うことのない少し高価なもの（カーテンや布団など）を買うようになり、それが地域のＧＤＰ増大につながる。

使用されたモリ券について、商店はモリ券とレシートを一緒に保管し、レシート分を実行委員会に請求する、もしくはモリ券をそのまま他の店舗で利用することができる。モリ券を再利用可能にするためには、その裏面にある使用履歴欄の日付と使用者、商店名をそれぞれ記入し、モリ券と同額の現金を交換する必要がある。地域通貨を使い回すことで、地域のＧＤＰ増大の効果を高めることができる。

実行委員会は出荷された木材をチップ業者などに木材１トン当たり3,000円（企業によって異なる）で売り払い、地域通貨（１トン当たり6,000円）との差額の3,000円（このような過払い分は逆ザヤとよばれる）は自己負担する。発生した逆ザヤに関しては、寄付をはじめ助成金、森林環境税などの多様な手法で補填し、持続的に循環できる方向を目指していく。

1-3　メリットと課題

先行研究から『木の駅プロジェクト』の一般的なメリットと課題を述べていく。始めにメリットについてだが、それは４つあると筆者は考える。１つ目は「林地残材の減少」で、山がきれいになるということである。なぜなら、森（2013）によれば、「ＮＰＯ法人土佐の森・救援隊の取り組みよりは小さなものであるが、各地が年間100トンから500トン程度の林地残材収集に成功している」ということであり、実際に山の荒廃を改善しているからである。２つ目は「地域のＧＤＰ増大」で、地域が活性化されるということ。これに関しては前述したように、地域通貨のルールはそれを期間内に使い切ろうと考えさせ、普段買わないような少し高価なものを買うようにさせて、地域のＧＤＰを増加させることが目的であるため、これはメリットであるといえる。３つ目は「人口増大」で、取り組みを知って収入を得たい人

がやってくるということだ。これは興梠・大内・垂水・北原（2013）によれば、「仁淀川流域においては山村の実家に戻ってきた若者や、所有山林で「年金＋α」の収入を得たい定年退職者等、ＵＩターン者が増え始め、仁淀川流域の山村では「土佐の森」方式を導入してから10人以上が戻ってきている」ということであり、土佐の森方式がこのような成果を上げているため、木の駅プロジェクトにおいても同様の効果が得られると期待できるからである。

４つ目は「Ｃ材の有効利用」で、Ｃ材の用途の広さからそれが地域の宝になるということだ。なぜなら、プロジェクトが始動することで、これまでほとんど利用されてこなかったＣ材が地域通貨と交換できるようになる。また、Ｃ材をチップ業者に引き取ってもらうだけでなく、薪にして販売（薪の駅プロジェクト）したり、岐阜県郡上市の白鳥町・高鷲町では割り箸を販売（割り箸プロジェクト）したりなどＣ材を有効利用することができるため、地域のお荷物となっていた山が宝の山に変わるからである。

次に課題についてだが、先行研究でまとめられているため引用する。森（2013）は次のように指摘している。

【逆ザヤ】: 販売額と購入額の差額分の赤字増大
【出口問題】: 自立できる価格の木材の売り先がない
【出材量低下】: 出しやすい山がなくなり出材量が低下
【事務局負担】: 事務局の担い手はボランティアで負担大
【地域通貨の偏り】: 一部のお店に利用が偏る等

以上のメリット４つ、課題５つを本論文における『木の駅プロジェクト』の一般的なメリットと課題とする。

第２章　東北地方の木の駅の事例

2-1　しらたか木の駅プロジェクトの事例

2-1-1　概要

白鷹町は山形県の南部に位置し面積は157.7平方キロメートル、人口は１万4,249人（平成27年５月時点）の小さな町である。町の中央を最上川が南北に流れ、東側は白鷹山などの白鷹丘陵、西側は朝日連峰に囲まれ、山岳部のほとんどは森林となっており、かつては林業が盛んであったが、今は稲作を主とした農村となっている。市街地は大きく二つとなっており、町東部の荒砥地区が実質的な中心部で白鷹町役場、消防分署、荒砥高校があり、また西部の鮎貝地区は文化交流施設や旧鮎貝城城址である鮎貝八幡宮などがある歴史的な街並みを形成している。

ＮＰＯ法人ひびき理事長の小林真氏がここ白鷹町でも木の駅プロジェクトを始めようと働きかけ、平成26年８月にしらたか木の駅プロジェクト実行委員会立ち上げ準備会を開き、翌月には第１回実行委員会を開催した。そして、その翌月に一般参加者を対象とした説明会を催して、同年11月には第１回木の駅集積イベントを開催し、「しらたか木の駅プロジェクト（以下しらたか)」が本格的に動き始めた。

次に木の駅についてだが、しらたかは民間の企業や団体、個人が主体となって運営する委員会体制で、実行委員会の中心となるメンバーは実行委員長の小林真氏と地域おこし協力隊の遠藤真弓氏を含む５名である。また、しらたかと関係を持つ組織として、白鷹町役場と置賜総合支庁の協力を得ている。運営費の主財源はボランティアであり、他企業・他団体からのご支援・ご協力をいただいている。現在では木の駅が木材１トン当たり4,000円に換算した地域通貨を支払い、企業は１トン当たり6,500円で買い取る。運送費1,400円を費用に加算しても1,100円の利益が得られるため、逆ザヤは発生しない仕組みとなっている。地域通貨の単位は１枚500円で、デザインは遠藤真弓氏が担当している。

図２　しらたか木の駅の集合写真

図３　しらたか木の駅の地域通貨

出典：「木の駅ポータルサイト」より引用

2-1-2　成果と課題

まず成果について、平成26年のデータを記述する。登録者は20人で出荷量は83ｔ、登録商店数は13店舗となった。木材の主な用途はチップであり、最終的な利用として山形県村山市のバイオマス発電所に売却する。当時は木の駅が木材１トン当たり6,000円に換算した地域通貨を支払い、企業は１トン当たり3,800円で買い取る。そのため、運送費α円を含めると2,200＋α円の逆ザヤが発生しており、ＮＰＯ法人ひびきが自己負担していた。しかし、インタビュー時（平成28年11月24日）の仕組みでは、先に述べたように木の駅が木材１トン当たり4,000円に換算した地域通貨を支払い、企業は１トン当たり6,500円で買い取るようになり、運送費1,400円が掛かるとしても1,100円の利益が得られるため、逆ザヤの解消に成功している。

次に課題について、平成27年時点では事務局の充実強化や集積した材のはけ口の開拓を挙げており、一般的な木の駅の課題に当てはまっていることが分かる。その他には森の健康

診断[4]の診断結果の分析、活用方法の検討も挙げている。しかし、平成28年から地域おこし協力隊が加わり、事務局の充実強化の課題は改善された。

2-2　二ツ井宝の森林（やま）プロジェクトの事例

2-2-1　概要

豊富な天然秋田杉の木材産業で栄えた能代市、その隣旧二ツ井町はその生産地、梅内地区は11の集落、戸数165戸ほど。森林面積は約1,900ヘクタール（集落林700ヘクタール、個人有林1,200ヘクタール）でスギ林が主である。

船山富雄氏は能代市役所を退職し、平成24年２月に「現代林業」で木の駅プロジェクトの取り組みを知った。翌月、二ツ井町でも木の駅プロジェクトを始めようと働きかけ、梅内聚落の役員会で検討し、「軽トラとチェーンソーで晩酌代を」を合言葉にした「二ツ井宝の森林（やま）プロジェクト（以下二ツ井)」の取り組みを決定した。５月には、コミュニティービジネスの立ち上げのために、能代市市民まちづくり活動支援事業に応募した。また、秋田県森づくり税事業にも応募し、森林の手入れのためのチェーンソー講習会を行った。その後、登録出荷者、登録店舗説明会を９月に実施し、木の駅が本格的に動き出した。24、25年度の取り組みは、集落林の間伐施業や林道開設などで出た林地残材を活用し、26年10月からは個人有林の間伐作業の出材を行った。

木の駅についてだが、二ツ井では運営主体はしらたかと同じ民間主体の委員会体制で、実行委員会の中心となるメンバーはプロジェクト代表の藤田孝一氏、事務局長の藤田定氏、事務局の船山富雄氏の３名である。プロジェクト全体では22名おり、60代が中心となっている。全体の７割（16名）が農業に携わっており、そのうちの４割（７名）が林業の仕事も行う兼業農家である。実行委員会の運営として、月１回会議を行うようにしている。二ツ井と関係のある組織として、市の助成金や出荷の際の森林組合の支援、商店は商工会の協力を受けるなど様々である。運営費の主財源は行政援助で、先述した能代市市民まちづくり活動支援事業という市の助成金である。地域で工夫していることとして、個人での出材より集落林の間伐による林地残材が多くあるため、会員の共同作業を基本としていること。また、自慢できることは、間伐材や林道開設などで林地残材は豊富にあるため、時期を考慮すれば出材量は増えるということだ。平成27年のデータでは、木の駅が木材１トン当たり4,600円に換算した地域通貨を支払い、企業も１トン当たり4,600円で買い取るため、逆ザヤは発生しない仕組みであった。地域通貨については、全国的に1,000円相当の地域通貨が主流で、買い物を楽しんでもらいたいため、単位は１枚1,000円とした。デザインは地域通貨担当の事務員が担当している。名前は「宝」であるが、これはプロジェクト名の宝の森林（やま）から取っている。

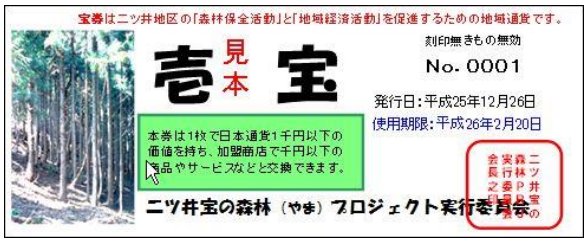
---

[4] 森林の管理計画を立てる上で必要とされるデータを得るための市民参加の大規模な人工林調査。

二ツ井では通常の活動に加えて、別の活動も行っている。１つ目は、次代を担う子供たちと宝の森林（やま）に親しむ活動である。毎年二ツ井小学校３年生と一緒に、４月はシイタケやナメコの植菌、６月は学習林の枝打ち、10月は馬子岱公園でモミジの植樹を行い、自然に親しむ体験活動にも取り組んでいる。この活動は継続して行っていくことにしているが、特に馬子岱公園をモミジ山として長期的に整備したいとの考えである。２つ目は、梅内山菜倶楽部の結成である。今までは男性軍の活動を中心とした活動であったが、 豊富な山菜を生かした活動ができないか、女性の方々から意見が出された。そこで、勉強会を秋田県元気ムラ支援室の協力を得て行い、まずはやってみることが大事だと参加者の意見が一致したため、活動母体を「梅内山菜倶楽部」として組織し、４月中に「タラの芽」と「こしあぶら」を試験的に出荷した。３つ目は、「薪の駅プロジェクト（薪販売）」である。発電所用チップ材は低価格であるため、付加価値をつけた販売で働く場の確保につなげることを目標に実施した。販売先確保、販売システム構築など課題は多いが、二酸化炭素削減、灯油価格上昇などで今後の需要は増える見込みである。 この地域でも薪は広葉樹という神話が根強いため、針葉樹の杉の間伐を進める方策としても機能している。27年度では、能代市民まちづくり活動支援事業を活用して、講演会の開催や薪割機の導入、看板設置といったＰＲ活動を行った。聚落（自治会組織）の役員がプロジェクトの役員として率先して取り組んでいる。集落の雑木林を活用できる、薪づくり倶楽部として会員が37名になるなど、今後地域ぐるみの取り組みに発展する可能性を秘めている。

図４　二ツ井木の駅の活動の様子

図５　二ツ井木の駅の地域通貨



出典：「木の駅ポータルサイト」より引用

2-2-2　成果と課題

まず成果についてだが、二ツ井では平成24年からプロジェクトが始動しており、27年までの４年間のデータがあるため、まず表を載せる（表１）。

表１　二ツ井の実績

項目	24年度	25年度	26年度	27年度
出荷先	市内バイオマス発電所	能代石炭火力発電所混焼用	能代石炭火力発電所混焼用	能代石炭火力発電所混焼用
出材価格	4,000円/トン	6,125円/トン	5,000円/トン	4,600円/トン
出荷期間	10月から12月	9月から3月	9月中旬から3月末	9月中旬から3月末
宝券発行期間	10月末から1月末	12月中旬から4月末	12月中旬から4月末	12月中旬から4月末
出荷登録者数	26名	21名	17名	19名
登録店舗数	21店舗	22店舗	22店舗	22店舗
出材量	約58トン	約88トン	約138トン	約168トン
出材金額	約25万円	約53万円	約72万円	約81万円
宝券使用実績	約21万円	約29万円	約34万円	約52万円
宝券使用店舗数	8店舗	10店舗	12店舗	14店舗

出典：「木の駅ポータルサイト」を参考に筆者作成

出荷先について、24年は「市内バイオマス発電所」であったが、25年以降は「能代石炭火力発電所混焼用」となっている。これは、24年度はソニー株式会社が環境保護（二酸化炭素削減）のため秋田県に寄付し、その寄付金を原資にバイオマス発電所が１トン当たり4,000円で買い取りしていた。しかしながら、ソニーの会社が赤字に転落しその寄付がなくなった。タイミングよく次の年から火力発電所が混焼を始めたこともあり、そちらにシフトしたためである。出荷者登録者数が全体的に減少しているのは、当初は趣旨に賛同してメンバーになった人もいたが、プロジェクト初期は機械力もなく難儀した割には晩酌程度の収入など、本当に森林の手入れが好きな人しか残らなくなったためだと考えられている。最近では機械が増えて環境が良くなってきているため、登録者数の増加に十分な期待ができる。登録店舗数や出材量、出材金額、宝券使用実績、宝券使用店舗数は年々増加しているため、プロジェクトは山をきれいにすること、地域を活性化させることに十分な貢献をしていることが読み取れる。

「薪の駅プロジェクト」については、27年度のデータより、５棚（１棚は横６メートル×縦0.9メートル×高さ1.5メートルの約８立方メートル）を製作し、2.5棚を販売することができた。

次に課題についてだが、平成27年時点のものを述べる。能代火力発電所の混焼への出材は単価が安い。そのため、今年と来年は県補助があるが、行政や森林組合へ支援要請すること。二ツ井町商工会の全面的な支援があり店舗は確保できたが、地域通貨の利用店に偏りがあり今後工夫が必要であること。新規の林道や作業道が整備されているため、個人有林の間伐も奨励し良質材の生産を図ることが挙げられている。

第３章　アンケートによる分析

3-1　全国の木の駅を対象とするアンケート調査に基づいた分析

『木の駅プロジェクト』のメリットと課題を明確にしていきたい。そのため、木の駅ポータルサイトに登録されている木の駅40カ所を対象としたアンケート調査を2016年12月に実施した。アンケートはメールを使用したインターネット調査で、配布40件、回収20件、有効回答20、回収率50％である。

始めに、全国にはどのような木の駅があるのか、どれほどの実績を上げているのかを知っていただくために、一覧表を載せる（表２、表３）。

表２　全国の木の駅の一覧表

番号	木の駅の名称	都道府県(空欄は同上)	地域(市町村)	開始(年)	引用するデータ(年)	出荷者(人)	加盟店(店)	搬出量(トン/年)	買い取り価格(1トンまたは1立方メートル当たりなど、『』は地域通貨名)	用途・販売先
1	ニツ井宝の森林(やま)プロジェクト	秋田	能代市	2012	2015	19	22	168	4,600円『宝券』	チップ(発電)、薪
2	しらたか木の駅プロジェクト	山形	白鷹町	2014	2014	20	13	83	6,000円『もり券』	チップ(発電)
3	木の駅プロジェクト美和	茨城	常陸大宮市	2012	－	48	56	277	5,000円『モリ券』	オガ粉
4	木の駅プロジェクトなかがわ	栃木	那珂川町	2013	－	14	42	150トン/45日	5,500円(H26)『地域通貨　森の恵-めぐみ-』	チップ(発電)
5	ちちぶ木の駅プロジェクト	埼玉	秩父市	2013	－	30	620	127(H25～H27)	4,000円『和同開珎』	オガ粉(キノコの菌床)、薪
6	木の駅どうしプロジェクト	山梨	道志村	2011	2012	25	43店舗中不明	386	5,200円『間伐材プレミアム付き商品券』	薪(温泉ボイラー)
7	木の駅かわね	静岡	川根本町	－	－	－	－	－	－－	－
8	信州　木の駅プロジェクト	長野	辰野町	2012	H24.10～H25.3	6	5	8	4750円『木判』	薪
9	木の駅ねばりん		根羽村	－	－	30	22	－	6,000円『ねばね森券』	薪
10	能登町里山「木の駅」プロジェクト	石川	能登町	－	－	38	51	90	6,000円『能登小判』	チップ
11	笠周木の駅プロジェクト	岐阜	恵那市	2009	2012	89	16店舗中不明	384.7	6,000円『モリ券』	チップ、薪(温泉ボイラー)
12	「木の駅」INいたどりがわ		関市	－	－	－	－	－	－『いた券』	－
13	「木の駅」INつぼがわ		関市	2013	－	－	－	－	－『つぼ券』	－
14	やまおか木の駅プロジェクト		恵那市	2013	－	17	9	1か月で40トン	6,000円『もり券』	薪(温泉ボイラー)
15	高山市木の駅		高山市	－	－	－	－	－	－－	－
16	高鷲町木の駅プロジェクト		郡上市	2012	－	6	3	43.9(H24.9～H25.3)	4,000円『たかす森守券』	チップ
17	白鳥町木の駅プロジェクト		郡上市	2012	－	7	－	26.4	－『モリ券』	チップ
18	木の駅上石津		大垣市	2011	2011	29	28	164	4,000円『かみいしづ里山券』	チップ(パルプ)、ペレット
19	旭木の駅プロジェクト	愛知	豊田市	2011	H27.11～H28.5	69	37	485	6,000円『モリ券』	チップ
20	とうえい木の駅プロジェクト		東栄町	2012	－	17	48	235(H24)	6,000円『オニ券』	チップ
21	額田木の駅プロジェクト		岡崎市	2015	－	58	28(H27)	目標値800(H27)	6,000円注1『森の健康券』	チップ
22	秋葉道木の駅プロジェクト		新城市	2012	H24.10～H25.1	7	7	42	6,000円『秋葉券』	チップ

※「木の駅ポータルサイト」を参考に筆者作成

注１．事務局経費として５％差し引く

表３　全国の木の駅の一覧表

番号	木の駅の名称	都道府県(空欄は同上)	地域(市町村)	開始(年)	引用するデータ(年)	出荷者(人)	加盟店(店)	搬出量(トン/年)	買い取り価格(1トンまたは1立方メートル当たりなど、『』は地域通貨名)	用途・販売先
23	甲賀木の駅プロジェクト	滋賀	甲賀市	－	－	42	22	200	6,000円『モリ券』	チップ
24	木の駅白山	三重	津市	2014	－	－	－	－	－『白山もり券』	－
25	よしの木の駅プロジェクト	奈良	吉野町	－	－	－	－	－	－『モリ券』	－
26	京丹後木の駅プロジェクト	京都	京丹後市	2012	－	30	90	160(H25)	6,000円『モリ券』	チップ、薪、ほだ木
27	丹波市木の駅プロジェクト	兵庫	丹波市	－	－	－	－	－	－－	－
28	丹波篠山木の駅プロジェクト		篠山市	2012	－	約60	約20	68.6(H26)	6,000円『里山券』	薪、ペレット
29	智頭町木の宿場実行委員会	鳥取	智頭町	2010	－	50	44	345(H26)	6,000円『杉小判』	薪
30	エコビレッジ阿波木の駅プロジェクト	岡山	津山市	2012	－	14	10	55	6,000円『こもれび券』	チップ(温泉ボイラー、パルプ)
31	鬼の搬出プロジェクト		美作市	－	H24.10～11月	18	25	215	－『オニ券』	－
32	東城木の駅プロジェクト	広島	庄原市	2014	－	95	78	約600	6,000円『里山券』	－
33	うんなん木の駅プロジェクト	島根	雲南市	－	－	75	34	313(H24.7～H25.1)	6,000円『里山券』	チップ(温泉ボイラー)
34	奥出雲町オロチの深山きこりプロジェクト		奥出雲町	－	－	48(H27)	463	609(H27)	6,000円『商品券』	チップ(温泉ボイラー)
35	「い～にゃん森の恵み」林活プロジェクト		飯南町	2014	－	76	227	160	6,000円『商品券』	オガ粉、薪(温泉ボイラー)
36	『山の宝でもう一杯！』プロジェクト		津和野町	－	－	28	52	237(H24)	5,500～6,000円『こだま商品券』	チップ
37	吉賀町木の駅プロジェクト		吉賀町	2012	H24.6～7月	13	16	61.9	4,500円『かき券』	チップ(発電)
38	さめうら水源の森木の駅プロジェクト	高知	土佐町	2011	H23.10～11月	26	26	208	6,000円『モリ券』	チップ(パルプ)
39	小国木の駅プロジェクト	熊本	小国町	2015	2016	－	－	120.29	－『モリ券』	薪(温泉ボイラー)
40	木の駅やっちろゴロタン		八代市	2014	－	21	21	1,200	5,700～3,700円『もり券』	チップ(発電)

※「木の駅ポータルサイト」を参考に筆者作成

表２、表３より、木の駅が東北地方では２つ、関東地方では３つ、中部地方では17カ所、近畿地方では６つ、中国地方では９つ、四国地方では１つ、九州地方では２つあり、中部地方が最も盛んである。また、買い取り価格や地域通貨名、用途・販売先などそれぞれ異なっており、その地域に合った設定のためにどの木の駅も個性が見られることが分かる。

では、アンケート結果に移る。

表４　全国の木の駅のアンケート結果

質問事項	○（%）	×（%）	△（%）	空欄（%）	判定
①林地残材の減少（山がきれいになった）	15（75）	2（10）	3（15）	0（0）	○
②地域のGDP増大（地域が元気になった）	13（65）	5（25）	2（10）	0（0）	△
③人口増加（地域の人口が増えた）	0（0）	19（95）	1（5）	0（0）	×
④C材の有効利用（C材が地域の宝になった）	13（65）	4（20）	2（10）	1（5）	△
⑤逆ザヤ（販売額と購入額の差額分の赤字増大）	6（30）	13（65）	0（0）	1（5）	△
⑥出口問題（自立できる価格の木材の売り先がない）	2（10）	13（65）	3（15）	2（10）	△
⑦出材量低下（出しやすい山がなくなり出材量が低下）	5（25）	12（60）	1（5）	2（10）	△
⑧事務局負担（事務局の担い手はボランティアで負担大）	3（15）	15（75）	1（5）	1（5）	×
⑨地域通貨の偏り（一部のお店に利用が偏る等）	13（65）	6（30）	0（0）	1（5）	△

※アンケート結果をもとに筆者作成

表４の「判定」について、獲得票が７割（14票）を超えているものはそのまま○（はい）、もしくは×（いいえ）で、どちらも超えていないものは△（どちらともいえない）としている。一般的には①～④が○、⑤～⑨は×が好ましい。調査結果として、①の林地残材の減少における効果は高いが、③の人口増加については効果が低い。また、⑧事務局負担は課題とはなりにくい。②地域のＧＤＰ増大、④Ｃ材の有効利用、⑤逆ザヤ、⑥出口問題、⑦出材量低下、⑨地域通貨の偏りに関しては地域によってそれぞれメリット・課題となりうることが分かった。

しかし、各項目で少数意見が必ず存在している。なぜその意見であるのかを見ていく。①に関しては、×が２票で「チェーンソーと軽トラでは限界がある」、「本格的な伐採までして搬出する人が少ないため」との回答を受け、△は３票で「全体から見れば一部しか美しくなっていない」との回答が２票と「他の地権者の山が間にあったり、道路との距離や田んぼがあったりすると人力では搬出できない」といった理由があるものの、「放置状態からすればかなり良くなった」と答える木の駅があった。全体として、山はきれいになってはいるものの、割合としては少ないため×や△を選択したのだと考える。

②については、×が５票で△が２票であるが、この項目に関しては△と×の理由が共通し

ており、「まだまだ元気ではない」や「あまり感じられない」、プロジェクトの規模が大きいため効果が出ているかが分かりづらいとの回答であった。こちらの少数意見は地域が元気になったとは言い難いためだということが分かった。

③は△が１票のみで、「分かる範囲では。全体では減。」との回答を得た。その木の駅では新しい参加者が加わったために△を選択したと考える。全体的に、『木の駅プロジェクト』自体には人を引き寄せるインパクトがまだないのだと思われる。

④について、×が４票で「そこまで事業が浸透していない」、「山の恵みの一つとの認識になった」といった回答であり、△は２票で「収益にはなったがまだ持続的に課題」や「Ｃ材の出方が減ってきた」との回答を受け取った。×は木の駅の活動年数が短いため、Ｃ材が有効利用できていない、また、Ｃ材が価値のあるものに変わったが、認識としては『地域の宝』ではなく『山の恵みの一つ』であるからといった理由から選択したことが分かった。△は現在Ｃ材を有効利用することができてはいるが、今後も同じように続けていけるかどうかという懸念から選択したのだと考える。

⑤に関して、○が６票で「現在は単価の安いチップ材販売のみ」で「補助金等で差額補填」しているためとの回答や、「市の補助金は永続性のあるものではないので、今後自立した販路の確保が重要」、「一部のスポンサーの負担が大きい」、「バイオマス発電所の稼働が始まったが、今のところＣ材価格の高騰には繋がって」おらず、「出荷量の増大により逆ザヤの額は大きく」なるとの回答を受けた。全体として木の駅の仕組みがまだ逆ザヤが発生するような価格設定、出荷先であるため、○を選択したと思われる。

⑥は○が２票で、「現在、ボイラーの薪転換を調査中」との回答であり、△が３票で「薪販売、町との繋がりで材の活用模索」、「自立できる価格であるかは不明だが、売り先はある」との回答を得た。この項目では新しい売り先を調査中であったり、売り先があるものの自立できる価格かどうかが分からなかったりしたため、○や△を選択したことが分かった。

⑦については○が５票で△が１票である。「町独自の森林作業道補助をしているが、出荷量は低下している」、「H26年度、H27年度に約1,200トンの材が出ているが、H28年度は10%減で推移して」おり、「出しやすい山から次第に奥山に入るようになってきている」、「林道、作業路付近の集材しやすいところが主であり、確かに量は低下する。他に出せる場所はあっても所有者不明や、理解を得られないなど」との回答を受ける。こちらは比較的長く活動している木の駅が出材量低下を実感している傾向が見られた。また、所有者不明の森林があり、それらが作業に支障をきたしているため出材量が低下し、○や△を選択したと考える。

⑧に関して、○が３票で「安定した経営がまだできていない」との回答であり、△は１票で「事務手数料を出荷者、商店からもらって」いるとの回答を受け取る。○の選択は事務体制がまだ整っていないためであることが分かった。△は多数意見（×）でも同様に手数料を出荷者からいただいているところがあるため、考え方の違いではないかと思われる。

⑨は×が６票で、「偏りはあるが、それほど課題とは認識されていない（商店関係者がほとんど会議に出てこない）」、「現在４店舗だけだが、不平不満は出ていない」、「当組織では

問題点まではいっていないと思う」との回答を得た。全体では、問題点とされるレベルの偏り具合ではないため、×を選択したということが分かった。

以上の少数意見を振り返って、⑤、⑥、⑦、⑧の少数意見は木の駅の仕組みが未完成であるためだと考える。逆に⑨は、その点に関しては完成されているため、問題視していない木の駅が占めている。しかし、仕組みが完成・未完成であるという要因だけではない項目もある。それらは④と⑦で、長く活動しているため生じている問題があるということ。これに反して、②、④、⑤、⑥、⑧は活動年数が短いため。そして、他の木の駅との考え方の違いから生じた少数意見は①、②、③、④、⑧、⑨であるということが分かった。

その他として自由回答欄を設けた。以下はその回答である。メリットとしては「高齢の経験者から経験の浅い若い人にこの地域の山に関する知恵、技術の伝承が多少なりとも起きている」、「地域資源の活用の重要性について町の人の意識喚起にはなった」、「木の駅事業が資源活用や林業振興の一翼を担うだけでなく、「町づくり」の人材育成やネットワークづくりに貢献できるのではないか」との回答で、課題としては「会員の高齢化」、「搬出不可能な部分（枝葉など）を林道に放置していくなど、一部のマナーのない登録者によって」クレームを受けたことがあるため、「規模拡大は良いことだが、顔の見える範囲内での取り組みこそ大切かもしれない」との回答を受けた。まず、高齢の経験者から経験の浅い若い人への知識や技術の伝承と会員の高齢化は、確かに木の駅のメリットと課題に各々当てはまることではあるが、全ての業種での企業や団体など木の駅だけに限ることではないため、それぞれが木の駅のメリット・課題であると明確には言い難いと考える。同様に、地域資源の活用の重要性を町の人々に気づかせることができるということは別の地域資源を生かす取り組みでも可能であるため、木の駅だけが持つメリットではない。また、マナーの悪さに関しても木の駅だけに当てはまる問題ではないと思われる。こちらの対策としてはその意見にあるように、顔の見える範囲内での取り組みにするか、話し合いの場でルールとマナーを十分に共有すべきである。

木の駅事業が「町づくり」の人材育成やネットワークづくりに貢献できるということについてだが、これは木の駅のメリットといえるのではないかと考える。そもそも『木の駅プロジェクト』とは、山の荒廃の改善や地域の活性化などの問題解決のために地域の山主や商店、Ｉターン者などのヨソ者による実行委員会が中心となって活動する取り組みである。その実行委員会の中で財政運営やルールなどが全て自分たちで決められるため、「自分たちの地域は自分たちで守る」という「自治」の意識が芽生える。また、山仕事を通じて山主同士、地域通貨を通じて山主と商店、商店同士といった仲間づくりも始まる。したがって、「自治」の意識が身に付けば同じように自分から意見を述べ、地域住民と議論して良案を決め、それを実行に移すことができるため、木の駅は「町づくり」の人材育成に適している。そして、木の駅での仲間づくりの経験はネットワークづくりでも応用できるため、木の駅事業が「町づくり」の人材育成やネットワークづくりに貢献できるということは木の駅のメリットではないかと考える。

次に、これまでの考えを深めるために、それぞれインタビュー調査を実施した。しらたか木の駅プロジェクトからは実行委員長の小林真氏（2016年12月15、26日）、二ツ井宝の森林（やま）プロジェクトからは事務局の船山富雄氏（2016年11月18日）に質問を行った。以下は質問項目とその回答である。

Ｑ１．木の駅プロジェクトは「自分たちの地域は自分たちで守る」という「自治」の意識を芽生えさせることも目的の一つであるが、実際に行ってその意識は芽生えたか。

しらたか）Ａ１．当然芽生えた。
二ツ井）Ａ１．芽生えた。資源を大事にするということは地域を大事にするということではないかと考える。

Ｑ２．山の境界は年々明確にされているのか。されている場合、どのように明確化を進めているのか。

しらたか）Ａ２．されている。ＧＰＳで地点登録・現地調査・仮杭・所有者立会い・杭打ち etc.
二ツ井）Ａ２．毎年というより今年から境界明確化事業が、国の補助だけでなく市が助成措置を講じたため、少しではあるが前進している。

Ｑ１の回答から『木の駅プロジェクト』には確かに「自治」の意識を芽生えさせることの効果もあるということが分かった。これにより、木の駅事業が「町づくり」の人材育成やネットワークづくりに貢献できることは、やはり木の駅のメリットといえるのではないかと思われる。

Ｑ２は木の駅プロジェクトの活動ではないが、①の「他の地権者の山が間にあったり、道路との距離や田んぼがあったりすると人力では搬出できない」という回答のように、木の駅の活動はもちろん、森林組合や林業などの企業による作業においても間接的に関わってくる問題であるため質問を行った。どちらも改善されていることが分かったが、二ツ井のように国の補助だけでなく、市からの補助もあって少しずつ前進しているとのことから、この問題の解決のためには行政の協力が必要不可欠ではないかと考える。

3-2　東北地方の木の駅の考察

東北地方の木の駅にはどのような特性が見られるのか。しらたかと二ツ井のアンケートの回答と比較する。まずはそれらの回答を載せる（表５、表６）。

表５　しらたかと二ツ井のメリットに関するアンケート結果

質問事項	しらたか 〇か× 	しらたか 理由	二ツ井 〇か× 	二ツ井 理由
①林地残材の減少（山がきれいになった）	〇	その通り	〇	
②地域のGDP増大（地域が元気になった）	〇	その通り	〇	自分の居場所づくりになっている
③人口増加（地域の人口が増えた）	×	人口増加と木の駅は直結しないから	×	
④C材の有効利用（C材が地域の宝になった）	〇	その通り	〇	今まで活用してなったので

※アンケート結果をもとに筆者作成

〇ははい、×はいいえである

表６　しらたかと二ツ井の課題に関するアンケート結果

質問事項	しらたか 〇か× 	しらたか 理由	二ツ井 〇か× 	二ツ井 理由
⑤逆ザヤ（販売額と購入額の差額分の赤字増大）	×	逆ザヤ解消	×	販売と購入との逆ザヤはない
⑥出口問題（自立できる価格の木材の売り先がない）	×	出口は工夫すればたくさんある	×	出口はいろいろある
⑦出材量低下（出しやすい山がなくなり出材量が低下）	×	出しやすいかどうかはあまり問題でない	×	森林の手入れは無限
⑧事務局負担（事務局の担い手はボランティアで負担大）	×	やれる方がやればいい	×	事務局体制（複数人）がある程度確立されている
⑨地域通貨の偏り（一部のお店に利用が偏る等）	〇	品揃え・やる気・本気度	×	偏りはあるが、登録店を増やしており使い勝手を追及している

※アンケート結果をもとに筆者作成

〇ははい、×はいいえである

表５、表６より、①、③、⑧はどちらとも表４での「判定」と同じ回答であり、その他は異なっている。メリットに関しては、両方の木の駅が③を除いた全てが〇、課題に関してはしらたかが⑨を除く全てが×で、二ツ井では全てが×と、東北地方の木の駅はほぼ適正な状態であることが分かる。

しらたかでは⑨の地域通貨の偏りについて、対策として出荷者が工夫していることがある。モリ券長者の小林孝一氏は『木の駅プロジェクト』の目的を理解し、モリ券の使用可能な商店全てに出向き使用する。商店側は孝一氏が確実に来るため有難いと述べており、地域の人との交流が深まったと実感している。最近では、木の駅実行委員長の小林真氏は孝一氏のような方をどう増やすかを課題としている。

持続可能な地域づくりにつながる自治的な木の駅の設営・運営手法などの情報を共有す

ることを目的とした東北ブロック木の駅会議（第２回）では、以下の特性があることを学んだ。しらたかでは通常の木の駅の活動に加えて、森の健康診断を両立し、団体としては地域おこし協力隊と連携している。安全対策として、しらたかでは別のＮＰＯ団体が講習会を開いており、二ツ井では全員のヘルメットと防護服（チャップス）の着用を義務付けている。また、どちらの木の駅も共同作業を基本としており、安全を心掛けている。そして学校とのつながりとして、二ツ井では自然に親しむ体験活動にも取り組んでいる。さらに事務局運営に関して、しらたかは毎月委員会を行うようにしており、二ツ井では不定期だがニュースを発行している。

他にも第２章で述べたように、二ツ井では梅内山菜倶楽部や薪の駅プロジェクトも実施しており、多岐にわたり挑戦していることが分かる。

木の駅の活動のマニュアルがあるとしても、全く同じになるということはなく、どちらも様々な取り組みを加えており、東北地方の木の駅は積極的に新しいことにチャレンジする傾向にあると推定される。

第４章　課題の改善に向けて

⑤の逆ザヤに関しては、プロジェクト始めは発生しても仕方がないと思われるが、市の補助金など数年単位であり、永続して受けられるわけではないため、差額を今後どのようにして少なくしていくか、またはなくすのかを計画していくべきである。また、「販売先を確保、少なくとも方針、戦略を立ててから事業立ち上げをすることが重要と考える」木の駅の意見を見て、プロジェクトの準備段階で行われる地域の現状や出荷先、資金調達の目処などを調べ、共有する勉強会に力を入れ、自分たちの地域ではどのようなやり方が最も適当であるのかを慎重に検討すべきだと考える。

⑥の出口問題解決のために、木の駅が地域の人々への薪ストーブの普及に努め、薪の販売ができるようにすべきである。なぜ薪なのかというと、作る側としては大きな製造工場を必要とせず、薪割り機やチェーンソーといった道具だけで済むため。その他の理由としては、薪は運搬コストが掛かるため、小さな流通をつくることができる、また、外部の木材価格の影響を受けにくいため、高値に設定することもできるといった要因から地域内でお金を回すことができるためである。

その後、薪ストーブが広く普及された地域では、薪の駅だけでなく、筆者は岐阜県郡上市の白鳥町・高鷲町で行われている割り箸プロジェクトをやっていくべきだと考える。なぜなら、「「郡上わりばし」に込められた森からのメッセージ」によれば、「１膳の単価は安いが、年間消費量は約180億膳と、住宅や家具などよりはるかに多い」ということであり、住宅や家具以上に需要がある割り箸で、国産材を使用したそれらの販売が一般的になれば、国産材の需要が高まり、多くの人が山へ足を運ぶようになって、山の荒廃の改善が一層進むと期待

できるためである。

環境への負荷を懸念する声が上がると思われるが、「「郡上わりばし」に込められた森からのメッセージ」は次のように述べている。

> 現在、割り箸の９割は中国からの輸入品。仮に割り箸をすべて国産材にしても、その割合は日本で流通している材木のわずか0.4%に過ぎず、日本国内において割り箸用の樹木を伐採することが森林破壊の原因になるとは考えにくい状況ですし、環境への負荷も小さくて済みます。また日本人は昔から使い終わった割り箸を燃料としてリサイクルしてきました。それもまた大切なこと。植林された山は、成長した分を伐採して使うことで良い状態を保っていけるのです

したがって、国産材を使って割り箸を作ることは環境破壊にはつながらない。逆に、国産材を使っていかなければならない現状であると考えられる。割り箸は使用後も集めて薪ストーブの燃料などになり、資源を無駄にすることなく使用できるため、積極的に国産材を使って割り箸を作っていくべきである。しかし、割り箸のリサイクルが十分にできないところではただ廃棄物が増えてしまうため、まだ割り箸プロジェクトに取り組むべきではない。その地域ではまず木の駅が地域の人々への薪ストーブの普及に努め、薪の販売ができるようにすべきである。

⑦については、山の境界の明確化に力を入れるべきだと考える。土地の問題は木の駅だけではどうにもならないことであるため、行政と協力し問題の解決を図ること。「所有者不明地等の地域協定的な条例の整備等、地域と行政が本質的な将来像を議論することが必要」と考える木の駅もあり、行政の協力を得るためにまずは木の駅会議にその人たちを招き、「将来、地域と行政がこのような関係になりたい、こうでありたい」、「山をきれいにするために所有者不明地をなくしていく必要があり、行政としてどういったことが可能であるのか」など議論すべきである。

⑨の地域通貨の偏りはプロジェクト初回、もしくは今回の活動で各商店での使用状況のデータをとり、次回の活動において、使用枚数が少なかったところでは地域通貨１枚分の価値を数百円プラスして使用できるというような取り組みをすると良いのではないかと考える。また、その課題の改善のために、木の駅実行委員会で登録商店の一覧表を作る、地域通貨に工夫を設けるなど確かに必要なことではあるが、しらたかの小林孝一氏のような人材の育成に力を入れること、出荷者に『木の駅プロジェクト』の目的を十分に理解してもらうことも大切ではないかと思われる。

おわりに

『木の駅プロジェクト』の全体的なメリットは７割以上を獲得した林地残材の減少だけであり、課題は見受けられないため、これだけ見るとメリットしかないように見える。しかし、５割以上を獲得したデータから地域によっては逆ザヤや出口問題、出材量低下、地域通貨の偏りといった問題が存在する。そのため、新たに木の駅プロジェクトを始める場合、すでに始まっている地域でも、前者はその地域にどういった問題が起こりうるのか、後者はどういった問題が起こっているのか、現状を把握し対策を練りつつ活動することで課題につまずくことなくメリットを受けられるのだと考えた。もちろん、そのメリットは林地残材の減少だけにとどまらず、その状態を維持しつつプロジェクトを長く続けることで、ＧＤＰが増大し地域が元気になった、Ｃ材が有効利用できてそれらが地域の宝に変わったと実感できるのだと思われる。そして、「自分たちの地域は自分たちで守る」という「自治」の意識を芽生えさせる効果も確かにあり、木の駅事業が「町づくり」の人材育成やネットワークづくりに貢献できると考えられる。

「『木の駅プロジェクト』は本気の地元山主３人とヨソ者１人いれば始められる」と丹羽健司氏（2014）はいう。実際、しらたかと二ツ井の木の駅はどちらも『ヨソ者』の立ち位置である小林真氏と船山富雄氏が木の駅を始めようとそれぞれ別の地域の人々に働きかけて始まった活動である。しかし、木の駅の立ち上げには必ずしも『ヨソ者』が働きかけるのを待つ必要はなく、『地域の人々』が始めようと呼び掛けても問題はない。その場合、自分たちのプロジェクトに『ヨソ者』を必ず参加させること。なぜなら、ヨソ者は中立の立場で物事を決められるなど、固定しがちな山村の人間関係に風を通してくれるからである。また、ヨソ者は役割として事務局が最適とされている。なぜなら、出荷者には発券で「ありがとう」、商店には換金で「ありがとう」と、地域デビューには最高のポジションであるからだ。ヨソ者はどんなに頑張ってもその地域の人になることはできないが、その地域がより良くなるためにはどうしたらよいかを考え、行動することができるはずである。この論文を読んだ人が少しでも多くの地域を回復させるために、木の駅プロジェクトの立ち上げに挑戦していってほしい。

東北地方での木の駅はしらたかと二ツ井の２か所のみであり、木の駅ポータルサイトに登録されていないところを含めても６カ所であるため、東北はまだまだ足りないと感じている。この論文を読んだ東北地方の人に「自分たちの地域でもやってみよう」というチャレンジ精神に火がつくことを願っている。その他の地域の人も東北地方へ赴くことがあれば、木の駅プロジェクトの立ち上げ、もしくは参加をしてみてほしいと考えている。

謝辞

最後に、本論文の執筆にあたって、お忙しいにも関わらず時間を割いてくださった二ツ井宝の森林（やま）プロジェクト代表の藤田孝一様、事務局長の藤田定様、事務局の船山富雄様、しらたか木の駅プロジェクト実行委員長の小林真様、地域おこし協力隊の遠藤真弓様、木の駅ポータルサイトに登録されている全国の木の駅各位、第２回東北ブロック木の駅会議にご参加した皆様、そして１年次の講義からゼミに至るまでご指導していただいた呉尚浩先生に深く御礼申し上げます。また、呉尚浩研究室の仲間にも心から感謝します。４年間、私を支えてくださった全ての皆様に心から感謝致します。本当にありがとうございました。

参考・引用文献

興梠克久・大内環・垂水亜紀・北原文章（2013）「自伐林家による林地残材の資源化～土佐の森方式・木の駅プロジェクトを事例に～」,『日本森林学会大会発表データベース』124（０）, p. 108, 日本森林学会.

佐藤宣子・興梠克久・家中茂編著（2014）『林業新時代―「自伐」がひらく農林家の未来』（シリーズ　地域の再生18）農山漁村文化協会.

「全国に広がっています！　木の駅プロジェクト」,『現代林業』2013年（567）, pp. 1-6, 全国林業改良普及協会.

「特集/森に集う仲間たち　森林（やま）の宝に無限の可能性を求めて」,『あきた森のシンフォニーＶＯＬ．５』2016年（５）, pp. 2-5, あきた森づくり活動サポートセンター.

「土佐の森方式、木の駅プロジェクト……Ｃ材元気市場が急拡大中」,『季刊地域』2013年（15）, pp. 88-91, 農山漁村文化協会.

丹羽健司（2012）「地域ぐるみのバイオマス材収集システム：木の駅プロジェクト：全国標準方式を開発（特集　バイオマス材収入から始める副業的自伐林業）」,『現代林業』（548）, pp. 20-29, 全国林業改良普及協会.

丹羽健司（2014）『「木の駅」山も人も軽トラ・チェーンソーでいきいき』全国林業改良普及協会.

森大顕（2013）「森と地域を元気にする木の駅プロジェクト（<特集>地域の森林資源を無駄なく使う）」,『森林利用学会誌』28（１）, pp. 73-78, 森林利用学会.

森大顕（2015）「森と地域が元気になる木の駅プロジェクト（特集　ＥＳＤと中部の「里山資本主義」）」,『人間文化研究所年報』（10）, pp. 11-19, 名古屋市立大学人間文化研究所.

ＷＥＢ参考・引用

赤池円（発行年不明）” file.2「森の健康診断」：森林ボランティア：森へ行こう！｜私の森.jp ～森と暮らしと心をつなぐ～”，
<http://watashinomori.jp/gotoact/job_vlt_02.html>2017 年２月９日アクセス.

筏井美枝子（2009）”木の駅プロジェクト-ポータルサイト-“,
<http://kinoeki.org/>2016 年 12 月 18 日アクセス.

”郡上杉の割り箸を通じて森と人との関わり方を考える 「郡上わりばしプロジェクト」 ｜中部を動かすポータルサイト DoChubu 中部の暮らし”，
<http://dochubu.com/2013/01/24/waribashiproject/>2016 年 12 月８日アクセス.

「山村の現状と問題点（要旨）（案）」
<http://www.sanson.or.jp/sokuhou/no_947/image/bessi1.pdf>2017 年２月９日アクセス.

「市民まちづくり活動支援事業（概要）」，
<http://www.city.noshiro.akita.jp/c.html?seq=2246>2017 年２月９日アクセス.

鈴木章（発行年不明）「5.木の駅プロジェクト ｜ 全国版コラム 続・森林を守る　～林業の現場から～」，
<http://www.chilchinbito-hiroba.jp/column/forest2/?p=176>2017 年 1 月 12 日アクセス.

「地域のまちづくりを担う人材育成 調査報告書(要約編 2)」，
<http://www.mlit.go.jp/kokudokeikaku/souhatu/h16seika/05gappei/05_syu_3.pdf#search=%27%E5%9C%B0%E5%9F%9F%E3%81%AE%E3%81%BE%E3%81%A1%E3%81%A5%E3%81%8F%E3%82%8A%E3%82%92%E6%8B%85%E3%81%86%E4%BA%BA%E6%9D%90%E8%82%B2%E6%88%90%E8%AA%BF%E6%9F%BB%E5%A0%B1%E5%91%8A%E6%9B%B8+%E8%A6%81%E7%B4%84%E7%B7%A8%EF%BC%92%27>2017 年３月５日アクセス.

“土佐の森・救援隊　／デジ森ドットコム［生き活きこうちの森］”，
<http://digi-mori.xsrv.jp/dmr/ouendan/v_tosanomori.htm>2017 年２月９日アクセス.

“ホーム － 山形県長井市　ＮＰＯ法人ひびきのホームページ”，
<https://www.hibiki-ryokuka.jp/>2017 年２月９日アクセス.